

# 第9章 受動態

## 第1節 能動態と受動態

### 1. 受動態とは

「主語が動作を行う」という、いわゆる普通の文の形を「**能動態**」と言います。これに対し、「主語が動作を行われる」という文の形を「**受動態**」と言います。

「能動態」では、「主語」は「動作を行うもの」であり、述語動詞の部分は「～する」や「～した」のような日本語となります。

一方「受動態」では、「主語」は「動作が行われるもの」であり、述語動詞の部分は「～される」や「～された」のような日本語となります。

<能動態> 「彼女<sup>は</sup>、彼女の夫<sup>を</sup>殴<sup>った</sup>。」

<受動態> 「彼女の夫<sup>は</sup>、彼女<sup>に</sup>殴<sup>られた</sup>。」

### 2. 受動態の作り方

#### (1) 「受動態」の肯定文

受動態は、英語では「**be 動詞 + 動詞の過去分詞**」の形で表現されます。「be 動詞」の部分は、普通の be 動詞のように、主語の「人称・数」および文の「時制」によって形が決まります。

(★「be 動詞の形」→ P. 84 参照。)

(★「動詞の形 5:『過去分詞』」→ P. 74 参照。)

「能動態の文」と「受動態の文」はたいてい変換可能です。「能動態」の文を「受動態」の文へと変換する際には、「能動態における目的語」が「受動態における主語」になると理解しておくとい良いでしょう。

「能動態」の肯定文を「受動態」の肯定文に変換する方法は、原則的に以下の通りです。

(a) 能動態の文での目的語を「主語」にする。人称代名詞ならば「主格」にする。

(★「『O』目的語」→ P. 6 参照。)

(b) 述語動詞を「**be 動詞 + 過去分詞**」の形に変える。

(c) 能動態の文での主語に「by」をつけて後ろに置く。人称代名詞ならば「目的格」にする。

<能動態> He **locked** the door. 「彼はそのドアを施錠した。」

<受動態> The door **was locked** by him. 「そのドアは彼によって施錠された。」

## (2) 「受動態」の疑問文・返答文・否定文

受動態の文では、述語動詞は、事実上「be 動詞」の部分です。従って、受動態の疑問文、「Yes」「No」の返答文、および否定文は、be 動詞の文と同じように作られます。

(★「be 動詞」の疑問文と返答文 および「be 動詞」の否定文 → P. 87 参照。)

例 1: **Was** the door **locked** by him? 「そのドアは彼によって施錠されたのですか?」  
→ Yes, it was. 「はい、そうです。」 / No, it was not. 「いいえ、違います。」

例 2: The door **was not locked** by him.  
「そのドアは彼によって施錠されたものではありません。」

## 3. 能動態から受動態への変換

「能動態」の文を「受動態」の文に変換するには、能動態の文での「目的語」を受動態の文における「主語」に置き換えなくてはなりません。従って原則的には、能動態の時に「目的語」が含まれている文、つまり「第3文型(S + V + O)」、「第4文型(S + V + O + O)」、「第5文型(S + V + O + C)」の文のみが受動態へと変換されます。

## (1) 第3文型(S + V + O) から受動態への変換

「S + V + O」という形の「第3文型」の能動態の文は、「目的語(O)」を「主語」に置き換えることで「受動態」の文に変換することができます。変換された受動態の文は、目的語が1つ無くなるため「S + V」という形の第1文型となります。

例: <能動態> Hiroki broke this window. 【第3文型】

「ヒロキはこの窓を壊した。」

→ <受動態> This window was broken by Hiroki. 【第1文型】

「この窓はヒロキによって壊された。」

(2) 第4文型(S + V + O<sub>1</sub> + O<sub>2</sub>) から受動態への変換

「S + V + O + O」という形の「第4文型」の能動態の文は、2つの「目的語(O)」のどちらかを「主語」に置き換えることで「受動態」の文に変換することができます。ところが、第4文型の文を受動態に変換する際、どちらかの目的語を単純に主語に置き換えれば良いというわけではありません。これを理解するため、まず、能動態における「第4文型」についておさらいをしましょう。

能動態における第4文型の2つの目的語を、前から順番にそれぞれ「O<sub>1</sub>」「O<sub>2</sub>」とします。基本的に、「O<sub>1</sub>」には「人」を表す言葉が入り、「O<sub>2</sub>」には「モノ」を表す言葉が入ります。

そして、第4文型の文は、「O<sub>1</sub>(人)」と「O<sub>2</sub>(モノ)」の順番を入れ替え、さらに「O<sub>1</sub>(人)」の前に前置詞(「to」か「for」)を置くことで、「第3文型」へと変換することができます。第3文型に変換された文では、「前置詞 + O<sub>1</sub>」の部分は、文の要素としては「目的語」で

はなく「修飾部分」として扱われます。第4文型から第3文型への変換の際に、前置詞の部分に「to」と「for」のどちらが使われるかは、その文の「動詞」によって異なります。

【第4文型】 → S + V + O<sub>1</sub> (人) + O<sub>2</sub> (モノ)

【第3文型】 → S + V + O<sub>2</sub> (モノ) + 前置詞 (「to」か「for」) + O<sub>1</sub> (人)

(★「第4文型」→P.11参照。)

◎「彼らは ジャックに 金メダルを 与えた。」

→(A) They gave Jack a gold medal. 【第4文型】

→(B) They gave a gold medal to Jack. 【第3文型】

(「第4文型」から「第3文型」への変換の際に、前置詞として「to」が使われる例。)

◎「彼女の姉達は 彼女に 大きなケーキを 作った。」

→(C) Her sisters made her a big cake. 【第4文型】

→(D) Her sisters made a big cake for her. 【第3文型】

(「第4文型」から「第3文型」への変換の際に、前置詞として「for」が使われる例。)

さて、以上を踏まえ、第4文型の「能動態」の文を「受動態」に変換するケースについて説明します。「能動態」から「受動態」に変換するのですから、理論上は、能動態における2つの目的語の「O<sub>1</sub> (人)」と「O<sub>2</sub> (モノ)」のどちらも、受動態では主語に置き換えられる、と考えられるはずですが、実際にはそう簡単にはいきません。

前述の(A)と(B)のように、第4文型から第3文型への変換の際に「to」という前置詞が使われる文の場合には、第4文型の文における「O<sub>1</sub> (人)」を主語に置き換えて受動態に変換するか、あるいは第3文型に置き換えた上で、その第3文型の文における「O<sub>2</sub> (モノ)」を主語に置き換えて受動態にするか、という2通りが一般的です。第4文型のままで「O<sub>2</sub> (モノ)」を主語に置き換えて受動態の文に変換するのは極めて稀です。

例1：<能動態> They gave Jack a gold medal. 【第4文型】

「彼らは ジャックに 金メダルを 与えた。」

→<受動態> Jack was given a gold medal (by them).

「ジャックは (彼らによって) 金メダルを 与えられた。」

(第4文型の文における「O<sub>1</sub> (人)」が主語に置き換えられた受動態の文。)

→<受動態> A gold medal was given to Jack (by them).

「金メダルが (彼らによって) ジャックに 与えられた。」

(第3文型に変換された文における「O<sub>2</sub> (モノ)」が主語に置き換えられ、受動態へと変換された文。)

→<受動態> A gold medal was given Jack (by them).

「金メダルが (彼らによって) ジャックに 与えられた。」

(第4文型の文における「O<sub>2</sub> (モノ)」が主語に置き換えられた受動態の文。極めて稀な例。)